様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年　5 月 28 日現在

機関番号：18001
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2009～2012
課題番号：21730704
研究課題名（和文）　沖縄戦を中心とした平和教育教材開発研究

研究課題名（英文）　Research for peace education teaching-materials development centering on Battle of Okinawa

研究代表者
山口　剛史（Yamaguchi Takeshi）
琉球大学・教育学部・准教授
研究者番号：20381197

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は次の 2 点にまとめることができる。一つ目は、「平和教育教材開発研究」の成果としての授業ワークシートの開発である。また、ワークシートを活用した実践記録の作成である。各学校に協力していただき、実験的授業を実施することができた。今回の授業は、2 時間で学べる沖縄戦学習である。小学校社会科歴史学習としても活用できるが、離島・へき地地域の子どもたちが沖縄本島の沖縄戦を学ぶ教材としても活用できる。この点は、沖縄県内においても離島の子どもたちが、具体的に沖縄戦の地上戦闘について学ぶこともなく、地上戦闘に関するイメージをもっていないという実態に対応している。これは、沖縄ないし沖縄戦に関する予備知識がなくても授業ができる教材化として、沖縄本島以外の子どもたちにも活用できるものをつくることになる。
二つ目は、離島における戦争遺跡の現状についての調査報告である。西表島には、「船浮要塞」というアジア太平洋戦争期に建設された要塞がある。しかし、そのほとんどは木々に埋もれジャングルと化している。これまで竹富町史や沖縄県の戦争遺跡分布調査の中で調査研究がすすめられてきた。この調査結果に新たな遺構の発掘を行い、遺跡の存在を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：
The result of this research can be summarized to the following two points.
First, it is development of a lesson worksheet. Moreover, it is creation of the practice record which utilized the worksheet. I was able to carry out the experimental lesson by cooperation of each school. This lesson is the Battle of Okinawa study which can be studied in 2 hours. It is utilizable as social-studies for elementary school, and the children of a remote area can utilize also as teaching materials which study Battle of Okinawa of a main Okinawa island. In order that islands children may not study this point about the ground battle of Battle of Okinawa concretely, it corresponds to the actual condition of not having an image about a ground battle.
Even if this does not have the preliminary knowledge about Battle of Okinawa, it serves as teaching materials utilizable also for various children as teaching-materials whose lesson is possible.
The second is an investigation report about the present condition of the ruins of war in islands. The fort built Funauki fort term is located on the Iriomote island at the Asia-Pacific war. However, the most was buried in trees and has turned into the jungle. Surveillance study has so far been recommended in the ruins distribution investigation of war of the history of Taketomi-cho, or Okinawa Prefecture. New ruins were able to be unearthed to these results of an investigation, and existence of ruins was able to be clarified.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
2012 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：教育学
科研費の分科・細目：教科教育学
キーワード：平和教育　沖縄戦　教材開発　戦争遺跡　戦争体験記録の教材

１．研究開始当初の背景

学術的には、沖縄戦研究においても、アメリカ公文書館の文書の掘り起こし、戦争体験者の聞き取り調査が継続してすすめられており、沖縄戦当時の軍隊の駐屯状況や軍隊と住民との関係などが明らかとなっている。また、戦争遺跡として全国的にその保存と活用が大きな議論となっており、沖縄においても埋蔵文化財センターの戦跡調査以降も、戦跡考古学の調査がすすみ、その成果は、南風原町にある沖縄陸軍病院壕の公開という形で、一般市民や修学旅行生に還元されている。

しかし、教科教育の分野では、これらの沖縄戦研究の成果、戦跡考古学の成果を生かした学習プログラムの作成、教材開発は進んでいるとは言い難い。２００８年には沖縄県教育委員会が沖縄戦学習に関する「指導事例集」を発行するなどしているが、高校における日本史授業、総合学習の実施例に留まっている。また、各教員レベルでは創意工夫をもって授業実践が行われているものの、その蓄積は教育界に共有されていない状況である。そのような中、沖縄県では毎年６月の慰霊の日の特設授業での全校集会やホームルームなどを活用した平和学習にとどまっているところが多く、必ずしも科学的事実に基づいた歴史認識を育む授業や、「平和が大事」という観念的な結論にのみ陥っている授業が散見される。

そのような中、最新の沖縄戦研究・戦跡考古学の成果を活用した、沖縄戦学習プログラムの作成は沖縄県内はもちろん全国的にも重要な課題となっている。

２．研究の目的

本研究は、小中学と高校を対象とした沖縄戦学習プログラムを作成することとする。沖縄戦はそれぞれ各地においてのその実相は多く異なる。そのため、沖縄戦の基本的な経過・全体像を学ぶ教材プランの作成、ならびに離島における沖縄戦学習のプランの作成を実施する。離島に着目するのは、沖縄戦というと一般的に激しい地上戦闘が行われたと認識されている。もちろんこの点は最も重要な沖縄戦の実相ではある。しかし、沖縄県は数多くの離島が存在する。その離島には直接地上戦闘がなかった場所、強制集団死などの悲劇的な犠牲があった場所などその様子は島々ごとに異なる。島の子どもたちにとっては、これらの具体像を学ぶことでよりリアルに沖縄戦を認識することができるだろう。そのため、特定の地域にしぼり離島における沖縄戦学習プランの作成をめざす。現在は八重山地方と慶良間諸島を想定している。

特に、社会科の授業の１時間ないし２時間を活用して授業実践のできる教材ならびに授業プラン、総合学習などの特設授業で飛び込みでも可能な１～２時間のプランを想定している。実際の学校現場では、特設授業に多くの時間を割くことはできない。そのため、１～２時間で展開できる学習プラン・教材を開発することは、教育現場でもっとも活用しやすい形といえる。これらを小学校・中学校・高校とそれぞれのレディネスにあわせ、各バージョンをつくることで、教育現場で活用される教材集の作成をめざす。

３．研究の方法

以下のような方法にて研究をすすめた。

① 先行研究の調査・現地での聞き取り調査を含む沖縄戦研究の整理、

② 教材開発研究

③ 公開授業による授業実践研究

④ 成果の還元～教員研修会の実施

４．研究成果

（１）平和教育教材開発

①概要

一つ目は、研究題目にある通り「平和教育教材開発研究」の成果としての授業ワークシートとそのワークシートを活用した実践記録である。各学校に協力していただき、実験的授業を実施することができた。

今回の授業は、2 時間で学べる沖縄戦学習ということで、小学校社会科歴史学習としても活用できるが、主に離島・へき地地域の子どもたちが沖縄本島の沖縄戦、多数の住民を巻き込んだ地上戦を学ぶ教材として実施した。ここには、沖縄県内においても離島の子どもたちが、具体的に沖縄戦の地上戦闘について学ぶこともなく、地上戦闘に関するイメージをもっていないという現実があった。教員は修学旅行において沖縄戦学習を行うのであるが、その際有効な教材がないという悩みが聞かれた。そのため、今回の実験的実践の中で離島の修学旅行の事前学習としてとりくむこととなった。これは、沖縄ないし沖縄戦に関する予備知識がなくても授業ができる教材化として、沖縄本島以外の子どもたちにも活用できるものをつくることになると考えた。

②ワークシートの特徴

具体的なワークシートの工夫として考えた点は次のようなものである。今回、証言を読む際に考えたポイントは「どうやって生き延びたのか」であった。多くの沖縄戦学習が、「沖縄戦において住民がいかに命を奪われたのか」という点に焦点が当たっている。これは戦争学習という点では当然のことである。戦争の不条理（いかに理不尽に人の命を奪っているのか）を具体的に学ぶことによって、戦争という直接的暴力を根絶していくのかを考えるのが平和教育の重要な論点だからである。戦争の否定のためには、戦争の実相を具体的に把握する必要があるのである。

しかし一方で戦争を題材とした平和教育にマンネリを指摘する声もある。その主張のひとつが、「戦争の嫌悪感ではなく平和教育に対する嫌悪感をつくってしまう」というものである。平和教育において、戦争体験の話ないし写真、映画などを繰り返し見せられることで、戦争への嫌悪ではなく気持ち悪いものを見せられる平和教育への嫌悪がおこり、平和教育というと「もうわかっている」という気持ちになってしまう。また、平和教育の結論が「戦争はだめ、平和が大事」という結論の押し付けになっている授業が多いため、子ども自身が思考することなく、その結論を感想文として書けばいいという認識をもっていることもある。子ども自身が「本当はどうなんだろう」「自分だったらどうするのか」という葛藤を生み出すことで、平和教育に対するマンネリを解決できるのではないか。

そのうえで沖縄戦の体験記録について、その取扱い方法を工夫したのが「どう生き延びたのか」を考えることであった。戦争体験記録は多くの人々の不条理な死を私たちに伝えてくれるものである。しかし、同時に体験者の語りは過酷の戦場の中で「いかに生き延びたのか」という証言でもある。そこにスポットを当てることで、生き残ることの困難な戦場を生き延びた経験として、子どもたちも読み取ることができるのではないか。そうすることで、たくさんの人々の死がある戦場となんとか生き残ることのできた戦場を両方見せることができるのではないかと考えた。そこに「当事者性」のある発問をつけることで、「戦場の実相」を子どもたちに追体験させることを授業にすえることとした。ここでも、証言によりリアリティをもたせるために伊佐順子氏の証言に出てくる食事（芋のでんぷんと黒砂糖を水でまぜたもの）を準備し、子どもたちがより想像しやすいような工夫をした。

③授業実践からみる教材の可能性

中心発問である「あなたが伊佐順子さんだったら」はこれまでの展開とは違ったものがあった。一つは、上原小での課題として挙がっていた「伊佐順子氏の捕虜になりたくない理由」を強調して読んだことがあげられる。もう一つは、一人ひとりの結論をもって意見交流するにとどめる（グループで統一しない）ことで、自分の意見を最後まで主張してもいいし、かつ意見を変えることもできるようにしたことである。その内訳は以下の通りである。

考えてみようーもしあなただったら もしあなたが順子さんだったら、どうすると思いますか？下から選んでみましょう。自分なりに当時の状況を想像して書いてみましょう。逃げなければ、２km 近くまで迫っている米軍がやってきてつかまる可能性が高いです。

私だったら，

①　伊佐順子さんと同じように喜屋武岬に行く６名（教員２名）

その理由

・自分が生きのびる方法を考えるのでいっぱいいっぱいになりそうだから。今はキレイゴト言っても、自分がそういう場面にあったら絶対、他の人のこと考えられない。みんな自分がかわいい。でも、とりあえず近くにかくれる場所があるか探す！

・つかまったら死ぬから。

・自分はこどものときにしにたくないから。

・おとうさんたちが死んでかなしいけど、自分がしにたくないから。
・ほりょになったらころされるから。
・捕虜になっておもちゃになりたくないから。伊佐順子さんと同じように喜屋武岬ににげる。親と一緒にいたくても死ぬより一人でもにげたい。

②　家族で離ればなれになるのはいやなので，家族一緒にとどまる３名（教員２名）
その理由
・ぼくは②がいいです。もしも①だと父や兄弟をおいていくわけにもないし③だと時間がかかって米兵につかまって殺されてしまうかもしれないけど、家族と一緒に死んだほうがいい。
・自分が生きていても、家族がいなければ、いやだし、生きていて心残りにしたくない。もし、にげたとしても最後まで生きのびれる保証はないから。
・自分も大事だけど、でも家族の方が大事だし、ずーと一緒にいたいからです。あとあせってパニくるかもしれないけど、でもうごける人だけでこうどうしてもちょーふあんになる。

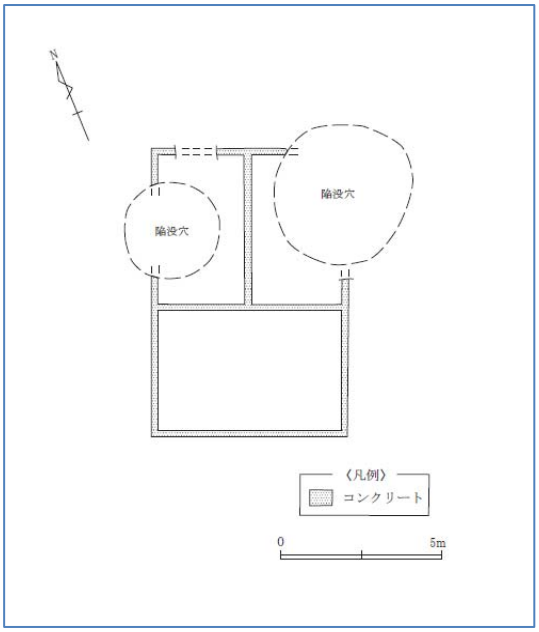
③　その他１名（教員１名）
その理由
・思いきって死を選ぶ（家族全員で）
・引きずってでもつれていく（教員の意見）

ここから読み取れることは、①を選んだ中に「殺される」という子と明確に「捕虜になっておもちゃになりたくないから」という子がいたことである。この子は女の子であり「おもちゃ」の意味を理解しての書き込みであった。残念ながら、この子の主張がクラス全体を揺るがすことはなかったし、授業者もここを広げることができなかったのが課題であった。そのかわりクラスの中でみんなが声をあげたのが、「思いきって死を選ぶ」という子の意見であった。この子は、最初は①を選んでいたのだが、②を選択した子から「逃げても死ぬかもしれない」と言われ、相当悩んでしまった。「どっちにしても死んでしまうのであれば、家族みんなで思いきって死んだ方がいいのでは」とこの子なりに結論づけたのであった。「集団自決」の論理ともいえるこの意見は、当然ながら「投降すれば助かる」という選択肢は除外された状態であり、その中での究極の選択をした例である。沖縄戦住民であれ、学徒であれ追い詰められた状態で「死を選ぶ」選択をした論理と似ていると言える。この子なりの論理でこの選択にたどりついたことは、当時の追体験をしたという点で深い葛藤をしたと言えるのではないか。この子の思考は本授業のねらいを達成したと言えるものであった。と同時に強制集団死「集団自決」について、「当事者性」のある発問を設定し、子どもたちと一緒に考えていける可能性を示してくれた。
もちろん授業の最後に、「投降しても殺されなかった」という事実を伝え「死を選ぶ」ことが最善の選択肢ということに歴史上はならなかったことをフォローをすることになった。
　議論としては、①を主張する子「この場合、自分の命が大事という主張」と②の主張「家族は見捨てられない」という子が激論を交わしたことで、「戦陣訓」を背景とした①と③の主張を中心とした議論にはならなかったが、全体に意見を共有したことで、「友達の意見」として自分とは違う意見を複数ワークシートに書きこんだ子が多く、自分自身の意見をつくりあげて終わりではなく、その意見を相対化するというプロセスは踏むことはできた。しかし、残念ながらその結果どのような学びがあったかを書き出させることはできなかった。
この教材の可能性を広げてくれた授業実践となったとは言えるだろう。

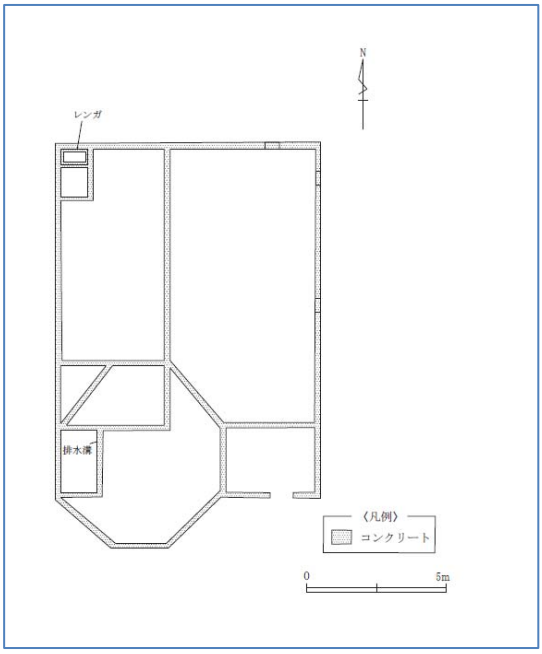
（２）離島における戦争遺跡調査
①概要
　二つ目は、離島における戦争遺跡の現状についての調査報告である。西表島には、「船浮要塞」というアジア太平洋戦争期に建設された要塞がある。しかし、そのほとんどは埋もれジャングルと化している。これまで、竹富町史や沖縄県の戦争遺跡分布調査の中で調査研究がすすめられてきた。しかし、地元の話ではそれ以外にもさまざまな遺構が残っていることが明らかとなった。拙著においても、数回これらの遺跡に関する調査を実施し報告を出してきた。今回は、独自に戦跡考古学に携わる研究者である山本正昭氏（沖縄県)、伊波直樹（島田組職員)、そして船浮在住の池田米蔵氏にもご協力いただき、追加調査を実施し、その活用の可能性について探ってきた。この点に関しては、調査報告の作成ならびに西表島での実験授業という形で実践することができた。

②西表島「崎山望楼」の現状
今回の調査において、２基の建物跡を確認する事が出来た。いずれもコンクリート基礎が残存しているが、建物の平面形状、立地等異なる特徴が見られたため、ここでは建物跡①、②として各詳細を述べる。

建物①の見取り図



建物②の見取り図



遺構の様子

以上の詳細は、「沖縄戦を中心とした平和教育教材開発研究報告書」にまとめ、関係者への配布、教材の普及を実施した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計１件）
（１）山口剛史、伊波直樹、山本正昭　離島における平和教育教材開発研究Ⅱ－戦争遺跡“西表島「崎山望楼」移籍の実態と現状”－　琉球大学教育学部紀要　79 号　2011　235-246 頁（査読なし）

〔学会発表〕（計２件）
（１）伊波　直樹　山口 剛史　「西表島・船浮要塞に関する現在までの調査・研究成果」沖縄考古学会 9 月定例会　平成 23 年 9 月 16 日　沖縄県立埋蔵文化財センター

（２）伊波直樹、山本正昭、山口剛史　「西表島『崎山望楼』の実態と現状」　沖縄・八重山文化研究会　２０１１年１１月２０日　沖縄県立芸術大学付属研究所

〔その他〕
「沖縄戦を中心とした平和教育教材開発研究報告書」　2013 年 3 月

６．研究組織
(1)研究代表者
山口　剛史（Yamaguchi Takeshi）
琉球大学・教育学部・准教授
研究者番号：20381197